

副詞の表記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 秀太 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/961

副詞の表記

中川 秀太

1. はじめに

現代の日本語は、漢字仮名交じり文を基本とし、「一個の自立語 + 0 個以上の付属語」からなる文節という単位は、「漢字+かな」のパターンを取ることが多い（佐竹（1989, p. 222））。佐竹は次の例文を示している。

- (1) 教育機関への／パソコンの／普及に／伴って／CAI への／関心が／日増しに／高まって／いる。

外来語の表記にはカタカナ、アルファベットが用いられ、それが漢字と同等の役割を果たす。(1) のような文を見ると、漢字仮名交じり文はいかにも読みやすいと感じられるが、本稿で問題にするのは、(1) の「日増しに」のような副詞の表記についてであり、「日増しに」の代わりに「段々」（本稿では、同じ漢字が連続する熟語については「々」を用いて表記する）が使われた場合には「段々高まって」というように、文節をまたいで「漢字+漢字」の文字列が生じることになる。それによって、(1) よりも読みにくいと感じるか、慣れていないから気にならないと感じるかには個人差があるものの、「漢字+かな」という典型的なパターンが崩れていることは確かである。このような漢字連続を避けるとなれば、分かち書きという手段が考えられる。たとえば映画やドラマの字幕では「一体 どうされたのです」「こんな夜分に一体 何事だ」（『復讐の春秋 臥薪嘗胆』中国ドラマ）、「君上に再度 進言する」（『趙氏孤児』中国ドラマ）など、漢字表記の副詞の後ろがかな表記の語であれば間はあけず、他方、副詞の後ろに漢字表記の語が続く場合には両者の間にスペースをあけているが、これは漢字連続による読みにくさを避けるためにとられた方法だと考えられる。しかし、一般の文章においては、スペースは用いない慣用になっているため、字幕のような対処はしにくい。したがって、漢字仮名交じり文を原則とし、かつ分かち書きをしないという条件のもとでは、「一体何事だ」のような漢字連続を頻出させないための工夫が必要になる。漢字表記の副詞と、その後続語との関係については、池上（1982, pp. 14-15）に以下の指摘がある。

- (2) 副詞については当用漢字表が出された時以来、むしろ仮名という線が強い感じであるが人によって分かれる所である。以前は仮名よりも漢字の傾向が強かった。字音語でト・ニをとらない「極力・断然」の類が多いが、ここで仮名を用いることが戦後は増した。それに二つの立場がある。仮名を

多くという主義が一つ。今一つは、この二字の漢字に直に名詞や動詞の漢字が続くと三字四字の漢語のように誤られ易いのを避けるという機能的理由によるものである。漢字で書くものを決めておいても一連の文となるときの前後関係で、切れ続きの配慮を要することがあるのである。

たとえば「直接」は「直接相談する」など副詞として用いるほか、「直接行動」「直接請求」などの熟語もあるため、未知の「直接～」の語を目にした際、いずれに解釈すべきか迷う恐れがある¹。ここでは池上の指摘をもとに、まず次のような条件を設けることにする。

- (3) 漢字表記の副詞の後ろに漢字表記の語が続く場合、読み手が、その全体を一語として読む（読みそうになる）恐れがある。あるいは、前後の文脈から一語ではないと判断するまでに手間がかかる。書き手には、極力、そのような読み手の負担を軽くするための工夫が要る。

すべての副詞について、後ろの語との漢字連続を避けることは不可能かもしれない。しかし、まったく副詞の表記について配慮しないのと、読み手のことを念頭に置きつつ文章を書くのとでは大きな差があるというのが(3)の趣旨である。以下2では、そもそも日常的に使われる副詞のうち、(3)のような注意が要る副詞がどれくらいあるのか、その範囲について検討し、続く3では、個々の副詞（漢字表記がある副詞）について、新聞・放送、教科書、公用文、国語辞典などで、どのような表記を標準表記として採用しているのかを比較する。そして4においては、文章が巧みなことで著名な7人の書き手を取り上げ、彼らが漢語副詞（漢字連続の問題が2字、3字の漢語副詞において特に顕著である）の表記について、どのような処理を行っているのかを分析する。

2. 表記が問題となる副詞の範囲

2.1 検討対象とする副詞

本稿では『角川必携国語辞典』（2016年12月20日発行の14版、以下『角川』）から「副」の記号が付いたものを抜き出し、そこに日本語記述文法研究会（2007）から「あした」など、いわゆる時の副詞の例を追加、また『NHK漢字表記辞典』（2011、『NHK』）、『記者ハンドブック第13版』（2016、『共同』）から『角川』にない副詞を追加し、合計1,273例を検討対象とした（以下では「副詞DB」と呼ぶ）²。これらの副詞について、『NHK』、『朝日新聞の用語の手引 新版』（2015、『朝日』）、『共同』、『読売新聞の用字用語の手引第5版』（2017、『読売』）、『最新公用文用字用語例集 改定常用漢字対応』（2018、『公用文』）、東京書籍の『教科書 表記の基準』（2018、『教科書』）、『三省堂国語辞典第7版』（2014、『三国』）、『新選国語辞典第9版』（2011、『新選』）、『明鏡国語辞典第2版』（2011、『明鏡』）を用い、どう書くのが標準表記とされ

ているのかを確認する³。

2.2 表記がかな書きに限定される語

以上で問題にしたのは、「一体」のように漢字表記のある副詞についてであった。したがって、そもそも漢字表記が一般的ではない語に関しては、範囲を確定したうえで、検討対象から外すことができる。そのような副詞には、まず外来語の「ジャスト」（『角川』の用例は「一二時～に着く」）が該当する。「副詞 DB」の中では、これが唯一の外来語である⁴。

和語については、一般的な漢字表記を持たない語が数多く存在する。「副詞 DB」に和語は 957 例あるが、そのうち、上記の辞書類いずれにも漢字表記がないものが 389 例ある。このうち、「うじうじ」「がぶがぶ」など ABAB 型が 158 例、「しっくり」「にんまり」など「～り」型が 86 例、「ぐさりと」「ぬっと」など「～と」型が 65 例、「あたふた」「どたばた」など ABCB 型とでも表せるタイプが 14 例、「いとも」など「～も」型が 7 例、その他が 59 例という内訳になる。語例を見てわかるように、擬声語・擬態語の類が多い。和語については、残りの 568 例に漢字表記の可能性がある。さらに、漢語の 215 例、混種語の 100 例にも漢字表記が存在するため、以上の 883 語について表記辞典などでは、どの書き方を標準表記とするのか決めておく必要がある。これについて、次の 3 で検討する。

3. 副詞表記と表記辞典

以下では『三国』『新選』『明鏡』をも合わせた総称として「表記辞典」という言い方を用いる。ここでは 2 にあげた数種の表記辞典を比較し、個々の副詞の表記として、どの書き方がいわば最大公約数に当たるのか、あるいはどこに判断の違いが見られるのかを探る。

3.1 和語の表記

3.1.1 表外字・表外音訓を含む語のかな書き

表記辞典では、原則として「常用漢字表」（2010）にのっとった表記を示すため、表外字（漢字表にない漢字）、表外音訓（漢字表にない音訓）は採用せず、かなで書くよう指示する。その際のパターンとしては、①語全体をかな書き、②語の前部分はかな書き、後部分は漢字表記、③語の前部分は漢字表記、後部分はかな書き、の三つがある。①に該当するのは「あさって（明後日）」「あした（明日）」「いずれ（何・孰）」「かねて（予）」「くしくも（奇）」「じかに（直）」「たちまち（忽）」といった副詞である。それから、②に該当するのは「いち早く（逸）」、「この頃（此）」、「この所（此）」、「ただ今（只）」といった副詞である。最後の③に該当するのは「幾ら（等）」「今なお

(尚)「折あしく(悪)」「夜ごと(毎)」といった副詞である。「なるべく」などは「成るべく」と書くこともあるが、表記辞典の判断としては、かな書きが普通である。副詞全体の意味を理解するのに、語頭の漢字が役立っていないと判断されるためであるが、以下の副詞の場合は、そのあたりの判断が辞書によって異なる。漢字を使っても文字数が減るわけではない点も、かな書きを取る動機となりうる。

(4) あくまで(NHK, 教科書, 朝日, 共同, 読売, 新選)・飽くまで(公用文, 三国, 明鏡)⁵ ※『三国』『明鏡』は、かな書きの選択肢も示す。

(5) ためつすがめつ(新選)・矯めつすがめつ(NHK, 読売, 三国, 明鏡)

さらに「ひとしお」「ひとしきり」「ひとまず」などは、「一」は表内音訓であるため、「一しお」「一しきり」「一まず」などとしてもよさそうだが、表記辞典の多くは、かな書きを標準表記としている⁶。

3.1.2 表内字・表内音訓のみからなる副詞

以下の副詞は、表内字・表内音訓のみからなるため、すべて漢字で書くとする判断もありうるが、「当用漢字表」(1946)の「使用上の注意事項口」に「代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべく仮名書きにする」と明記されてからは、副詞はかな書きが基本的であるとの考えも強い。それゆえここでは、①かな書きが好まれる副詞、②漢字表記が好まれる副詞、③表記辞典ごとに判断が異なる副詞、という順に見ていく。

①には「いやに(嫌に)」「つまり(詰まり)」「つゆ(露)」「なみなみ(並々)」「まさか(真逆)」「やまやま(山々)」といった副詞がある。また「当用漢字表」の「使用上の注意事項へ」で「当て字は仮名書きにする」と指示されてからは、当て字は原則として用いない傾向にあり、「かなり(可成)」「さほど(左程)」「やはり(矢張)」などの漢字表記は避けられる。

②には、語頭(および語中)が漢字で、語末がかな書きされる副詞が当てはまる。

明け暮れ、明けて、挙げて、朝な朝な、朝な夕な、頭から、危なく、危うく、改めて、併せて・合わせて、生き生き、幾重にも、幾久しく、入れ代わり立ち代わり・入れ替わり立ち替わり、生まれながら、大いに、多かれ少なかれ、大きに、多く、押して、遅かれ早かれ、遅くとも、お平らに、同じ、同じく、覚えず、思い思い、思うに、*主に、及ばずながら、折り入って、折り返し、陰ながら、必ず、必ずしも、必ずや、辛くも、*仮に、*仮にも、口々に、口ずから、心して、心ならずも、試みに、好んで、幸い、*強いて、縮めて、少なからず、少なくとも、少し、少しく、少しも、進んで、絶えず、絶えて、互いに、確か、直ちに、例えば、試しに、近いうちに、近く、誓って、謹んで、努めて、*常に、手ずから、手に手に、手もなく・手も無く、遠からず、遠く、時には、所構わず、取り急ぎ、

半ば、長らく・永らく、泣く泣く、何か、何が、何がなし・何が無し、何くれとなく、何せ、何一つ、何やら、何より、*何だか、*何で、何なりと、根っから、根掘り葉掘り、軒並み、残らず、図らずも、初めて、*果たして、早くも、晴れて、晴れ晴れ、冷え冷え、引き続き、一思いに、人知れず、日ならずして、日に日に、日増しに、伏して、再び、二つながら、奮って、程なく、負けず劣らず、誠に、道すがら、見るからに、昔ながら、もう一つ、最も、求めて、*物の見事に、夢にも、世にも、夜もすがら、*割と、我知らず、我と

※アスタリスクを付したのは、『三国』のみにかな書きの選択肢が示されている副詞。

新聞の表記辞典には「訓読みのものは平仮名書きを原則とする。ただし訓読みで漢字を用いた方が意味が明らかになる場合は漢字書きにしてもよい」(例は「青々と」「重ねて」「幸いに」「奮って」など(『共同』))、「和語でも漢字を使うことで意味がよく分かるものは漢字を使ってもよい」(例は「必ず」「強いて」「再び」など(『読売』))といった文言が付されることがある。これらの表記辞典は、主に記者や編集者が使うものだと割り切って考えれば、以上の示し方でも問題ない、とも言える。しかし、意味がよくわかるという点は個人差もあり、いくらかこだわって考えれば、次のようなことが言える。㊦「必ず」など話しことばでも使う副詞について、漢字なしでは意味の理解に困難が伴うとは言いにくい。㊧「あおあおと」と書くよりも「青々と」と書くほうが語の特定がしやすいということはあるかもしれないが、それは意味がわかりやすいこととは別問題である。㊨「再び」などと書くことによって意味のわかりやすさに影響があるとすれば、たとえば「再興」「再審」などについて「漢字が訓の「ふたたび」に用いられるものと同じである。それゆえ「再興」は「再びおこる」、「再審」は「再び審査する」と理解できる」というように、和語と同じ字を用いた漢語を理解するのに漢字が助けになるということであって、和語副詞そのものを理解するのに漢字が助けとなるわけではない。したがって、語の特定や漢語の理解に役立つということを理由に、和語副詞に対して漢字を使ってもよいという形で記述するのが対案となる(もしかすると、漢字で書いてもよいとする上記の引用文の文言は、このような意味を込めて書いているのかもしれないが、その意を伝えるには、ややことばが足りないと感じる)。あるいは、新聞の場合、漢字を使うことでスペースが節約できる、または、漢字の部分を読み飛ばすことで速読が可能であることといった点も、漢字を使う理由になりうる。そういった理由を記したからといって、新聞社などにとって不都合とはならないはずである⁷。

次に③の「表記辞典ごとに判断が異なる副詞」をあげるが、標準表記に関心がある人にとって参考材料となるよう、すべての例を提示する。表の見方を説明すると、たとえば「あと・後」について『NHK』に「1」とあるのは「あと」が標準表記で「後」

が第2の表記であること、『明鏡』に「2」とあるのは「後」が標準表記であることを表す。複数の表記候補がある場合は、その辞書における優先度の高い表記から順に示した。△は、その語自体は名詞として立項されていても、それが副詞用法に適用される表記なのかどうか判断できないことを表す。名詞は漢字、副詞はかなという書き分けの見られる場合もあるので、慎重を期して対象外とした。×は、その語が立項されていないことを表す。「教」は『教科書』,「公」は『公用文』の略称として使う。なお、たとえば「あまり」について『明鏡』では、表記欄に「余り」を示し、参考情報として「かな書きが普通」と示すが、これは第1表記が「あまり」、第2表記が「余り」とであると解釈する(「一般にかな書き」という表現の場合も同様)。また、同辞典の「いやいや」の項には、表記欄に「嫌嫌」とあり、参考情報として「かな書きも多い」(語によっては「かな書きが多い」とも)とある。この場合は、第1表記が「嫌嫌」、第2表記が「いやいや」とであると解釈する。加えて「なかなか」についての「中中・仲仲」など、複数の漢字表記がある場合、表にはそのうちの一つのみを記す。『三国』についても同様の処理を行ったところがある。

表1 各表記辞典における和語副詞の表記

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
あと1・後2	1	△	1	1	1	△	1	△	2
あまり1・余り2	1	1	1	1	1	2	1	1	1・2
あらかた1・粗方2	1	×	1	1	×	×	2・1	1	2
いきおい1・勢い2	1	1	△	1	×	2	1	2	2
いくつ1・幾つ2	1	△	△	△	×	△	△	2	2・1
いたって1・至って2	2	1	2	2	×	2	2・1	2	2
いま1・今2	1	×	1	1	×	△	2・1	2	2
いまさら1・今更2	1・2	2	2	2・1	×	×	2・1	2	2
いましがた1・今しがた2・今し方3	1・3	3	×	×	×	3	3・2	3	3
今どき1・今時2	1	×	×	1	×	×	2・1	2	2
いまに1・今に2	×	2	×	2・1	×	×	2・1	2	2
いまひとつ1・いま一つ2・今一つ3	1	×	2	1	×	×	3・2	3	3
いまや1・今や2	×	×	×	2・1	×	×	2	2	2
いやいや1・嫌々2	×	1	×	2	×	×	2・1	1	2・1
いろいろ1・色々2	△	1	×	△	×	1	2・1	1・2	2・1
いわば1・言わば2	1	1	×	1	1	2	2	1・2	2
うきうき1・浮き浮き2	1	1	×	2	×	2	2・1	1	2・1
えてして1・得てして2	1	×	2	2	2	×	2・1	1	2・1
おいおい1・追い追い2	1	1	1	1	×	×	2・1	1	2・1
おおかた1・大方2	1	△	1	1	1	2	1・2	2	2
おおむね1・大旨2	1	1	1	1	1	1	1	1	2
おそらく1・恐らく2	2	2	2	2・1	2	2	2・1	2	2
おそろおそろ1・恐る恐る2	2	1	2	2	×	×	2・1	2	2
おちおち1・落ち落ち2	1	×	1	1	×	×	2・1	1	1
おっつけ1・追っつけ2	1	×	×	2	1	×	2・1	1	2・1
おって1・追って2	2	1	×	2	×	2	2・1	2	2
思いきり1・思い切り2	△	2	△	△	×	△	2	1	2

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
思いのほか1・思いの外2	1・2	1	×	×	×	×	2・1	2	2
思うさま1・思う様2	×	×	×	×	×	×	2・1	2	1・2
おりおり1・折々2	△	△	△	×	△	△	2・1	2	2
折よく1・折良く2	1	1	×	1	1	×	1	2	1
かきさて1・重ねて2	×	1	×	2	2	×	2	2	2
かたっぱしから1・片っ端から2	×	1	×	×	×	×	2	2	2
かつ1・且つ2	1	1	1	1	1	△	2・1	1・2	2
かねがね1・兼ね兼ね2	1	1	×	×	×	×	1	1	2・1
かろうじて1・辛うじて2	1・2	2	2	2	2	2	2・1	1・2	2・1
かわるがわる1・代わる代わる2	1・2	×	2	2	2	×	2・1	2	2
きまって1・決まって2	2	1	×	2	×	×	2	2	2
心おきなく1・心置きなく2・心置き無く3	1	1	2	2	1	×	3・2	2	2・3
こころもち1・心持ち2	1	2	△	1	×	△	2・1	1	2
ことさら1・殊更2	1・2	1	×	2・1	×	2	2・1	2	2・1
ことに1・殊に2	1・2	2	2	2・1	×	2	2・1	2	2
ことのほか1・殊のほか2・ことの外3・殊の外4	1・4	2	4	4・3	×	4	4・1	4	4
こまごま1・細々2	1	△	1・2	1	×	×	2・1	1	2
さきに1・先に2	×	2	×	2	×	1	2・1	2	2
先ほど1・先程2	△	1	×	1	×	1	1	△	2
さしあたり1・差し当たり2	1	1	2	2	×	2	2	2	2
さしずめ1・差し詰め2	1	1	1	1	1	1	2・1	1	2
さしむき1・差し向き2	×	×	×	×	×	2	2・1	2	2・1
さだめし1・定めし2	1	1	×	2	×	2	2・1	1	2
さらさら1・更々2	1	×	×	×	×	×	2・1	1	2・1
さらに1・更に2	1・2	2	2	1	×	2	2・1	2	2・1
しぶしぶ1・渋々2	1	1	2	2	×	2	2・1	1・2	2
すかさず1・透かさず2	1	×	×	1	×	×	2・1	1	2
すぐれて1・優れて2	×	1	2	×	×	×	2・1	2	2・1
すでに1・既に2	1・2	2	2	2・1	×	2	2・1	1・2	2
すべて1・全て2	1・2	△	2	△	2	2	2・1	1・2	2
たかが1・高が2	×	1	1	1	×	×	2・1	1	2・1
たかだか1・高々2	※	1	1	※	1	×	※	2	2
たちどころに1・立ち所に2	1	1	×	1	×	2	2・1	1	2・1
たびたび1・度々2	1・2	1	2	2・1	2	×	2・1	1	2
ちかちか1・近々2	1・2	2	2	2	×	2	2・1	1・2	2
ちちに1・千々に2	×	×	×	2	×	2	2・1	1	2
つまるところ1・詰まるところ2・詰まる所3	×	×	×	×	×	×	3・1	2	2・3
つやつや1・艶々2	×	×	×	×	×	×	2・1	1	2
ときおり1・時折2	2	1	2	2	2	2	2	2	2
ときどき1・時々2	△	1	2	△	2	△	2・1	1	2
ときに1・時に2	2	1	×	2	×	×	2	2	2
ところどころ1・所々2	1	△	×	△	×	×	△	2	2
とびきり1・飛び切り2	2	1	×	2	2	△	2・1	1	1・2
とびとび1・飛び飛び2	1	×	×	1	×	×	2・1	2	2
とども1・共々2	1	1	1	1	×	2	2・1	1	2
ともに1・共に2	1	1	×	2	2	2	2・1	2	2
とりわけ1・取り分け2	1	1	1	1	1	2	2・1	2	2
とんと1・頓と2	×	×	×	×	×	×	1	1・2	1

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
なかなか1・中々2	1	1	1	1	1	1	2・1	1	2
なに1・何2	1	2	△	△	×	△	2	2	2
なにさま1・何様2	△	×	×	×	×	×	1	1	2
なにも1・何も2	※	2	×	×	×	×	2	※	2
なんか1・何か2	×	2	×	×	×	×	2・1	2	2・1
なんて1・何て2	×	1	×	×	×	×	2・1	2	2
なんとなく1・何となく2・何と無く3	2	2	2	2・1	×	×	3・1	2	2・3
なんとも1・何とも2	2	2	×	2・1	×	×	2・1	2	2
はしなくも1・端無くも2	1	1	×	×	×	1	2・1	1	2・1
はなはだ1・甚だ2	2	2	2	2・1	×	2	2	1・2	2
はや1・早2	×	×	×	1	×	×	2・1	2	2
はやばや1・早々2	1	2	2	2	2	×	2	1・2	2
ひとかたならず1・一方ならず2	2	1	×	1	×	×	2・1	×	2
ひときわ1・一際2	1	1	1	1	1	×	2・1	1	2
ひとしく1・等しく2	1	×	×	×	×	1	2	×	2
ひとつ1・一つ2	1	1	△	△	×	△	2・1	1	2
ひととおり1・一とおり2・一通り3	2	1	△	×	×	△	3・1	3	3
ひととき1・一時2	1	△	×	△	×	×	△	△	2
ひとり1・独り2	△	1	△	△	2・1	2	2	1	2・1
ひとりずに1・独りに2	1	×	×	1	×	×	2・1	1	2・1
ひとわたり1・一わたり2・一渡り3	1	1	×	×	×	1	2・1	1	2
まさしく1・正しく2	1	1	1	1	1	2	2・1	2	2
まさに1・正に2	1	1	1	1	1	2	2・1	2	2
また1・又2	△	△	△	△	1	△	2・1	1	2・1
またしても1・又しても2	×	×	×	×	×	×	2・1	1・2	2・1
またまた1・又々2	×	1	×	×	×	×	2・1	1・2	2・1
またもや1・又もや2	×	×	1	×	1	×	2・1	1・2	2・1
まったく1・全く2	2	2	2	2・1	2	2	2・1	2	2
まっぴら1・真っ平2	2	1	×	2・1	×	×	2・1	1	2
まま1・間々2	×	1	×	2	×	×	2・1	1	2・1
まもなく1・間もなく2・間も無く3	1・2	2	×	2	2	2	3・1	1	3・1
まるごと1・丸ごと2	2	1	×	×	2	×	2	2	2
まるっきり1・丸っきり2	×	×	1	1	1	×	2・1	2	2
まるで1・丸で2	1	1	1	1	1	×	1	1	2
まるまる1・丸々2	1	※	2	2	2	×	2・1	1	2
まんざら1・満更2	1	×	1	1	1	×	2・1	1	2・1
みすみす1・見す見す2	1	×	×	×	×	×	2・1	1	2・1
みな1・皆2	△	×	△	△	×	△	2	1	2
みるみる1・見る見る2	1	1	×	2	×	×	2・1	2	2
もっぱら1・専ら2	2	1	2	2・1	×	2	2	2	2
もともと1・元々2	1	1	×	2・1	×	×	2・1	1	2
もとより1・元より2	1	1	1	1	×	1	1	2	2
もれなく1・漏れなく2・漏れ無く3	2	1	×	2	×	×	3・2	2	3・1
ゆくゆく1・行く行く2	1	1	2	1	×	2	※	2	2・1
よく1・良く2	×	1	1	1	1	1	2・1	1	1・2
よくも1・善くも2	×	×	×	×	×	×	1	1	2・1
よくよく1・善く善く2	1	×	×	×	×	×	1	1	2・1
よっぴて1・夜っぴて2	×	×	×	×	×	×	2	1	2
夜どおし1・夜通し2	2	1	×	×	×	2	2	2	2
よほど1・余程2	1	1	2	1	1	1	2・1	1	2・1
わずか1・僅か2	△	×	△	1	1	2	2・1	1・2	2

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
わりあい1・割合2	△	1	2	2	2	2	2・1	2	2
わりかし1・割合し2	×	×	×	×	×	×	2・1	1	2
わりに1・割に2	1・2	1	2	2・1	2	2	2・1	2	2
われがちに1・我がちに2・我勝ちに3	1・3	×	×	×	×	3	3・2	3	3
われさきに1・われ先に2・我先に3	1・3	×	×	2	3	3	3	3	3

※表内に※とあるものは、意味による使い分けが記されている項目である。「たかだか」について『NHK』『共同』『三国』は、「声高々と」「たかだか100円の品」(『NHK』の用例)のように書き分ける。「なににも」について『NHK』『新選』は「何もない」「なににもそんなにまで」(『NHK』の用例)のように、「まるまる」について『教科書』は、「丸々と太った赤ちゃん」「まるまる一日かかった」のように、「ゆくゆく」について『三国』は、「行く行く落日を見る」「行く行く・ゆくゆく」は大物になるだろうのように、それぞれ書き分ける。

漢字が語の意味を理解するうえで助けにならないと感じられれば、かな書きへの移行が起る。「粗方→あらかた」「おいおい→追い追い」「落ち落ち→おちおち」などがこれに当たる⁸。「いまひとつ」は、かな書きの『NHK』『朝日』『共同』と「今」を漢字表記とする国語辞典との違いが目立つが、前者では意味が「現在」から「もう」の意味にずれてきて、漢字を用いることに違和感が持たれた結果だと言え、後者は同じ「いま」という語である以上、どちらの意味でも漢字表記で構わないという判断の結果ととらえられる。以下では「もう」の意味の「いま」について、かな書きを選ぶことの効果の面を考えることにする。「いまひとつ」「いま一度」「いましばらく」などの「いま」の意味・用法は「もうひとつ」「もう一度」「もうしばらく」の「もう」と並行的である。さらに副詞本来のアクセントは頭高型であるが、「いまひとつ」「もうひとつ」などと使う場合には平板型になる点も共通する。では表記はいかに、と考えたとき、「今ひとつ」「今一度」「今しばらく」とかな書きの「もう」とでは両者の違いが際立つ。一方「いまひとつ」のように、かな書きにすれば、意味・用法、アクセント、表記の三つともに類似する⁹。これがかな書きの効果だと考える。

副詞のかな書きについては、同じ表記の別の語つまり同表記異語との区別のために、かな書きを選択するという場合もある。「明日(みょうにち)」「昨日(さくじつ)」「今日(こんにち)」「今年(こんねん)」「一度(いちど)」に対する「あす」「あした」は表外音訓)「きのう」「きょう」「ことし」「ひとたび」など。加えて「あとあと」と「のちのち」,「なぜ」と「なにゆえ」の表記が問題となる。それぞれの区別が表記によって可能なことが望ましいとの立場に立てば、かな書きなどの方法が取られる可能性がある一方、文脈からいずれの読みなのかが判断できる、あるいは意味さえわかれば読みは問わないといった立場を取る場合は、そのような書き分けは行われない。「なぜ」に関しては、「何故」と書くのが表外音訓であるため、「何故」は「なにゆえ」にしぼられると言えないこともない。しかし、一般には「常用漢字表」に沿った書き方をしない、表を知らないという日本語話者が多く、「何故」を「なぜ」という日常語の読みとして解釈してしまう恐れは多分にある。それゆえ、この点を重く見る表記辞典においては、「なにゆえ・何ゆえ」といった表記が選択される。

表2 同表記異語のある和語副詞の表記

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
あす1・明日2	△1・2	△2	△1・2	△2・1	△2	△2	△2・1	△2	2
あとあと1・後々2	△1・2	△2	×	×	×	×	△2	△2	△2
きのう1・昨日2	△1・2	△2	△2	△2・1	△2	△2	△2・1	△2	△2
きょう1・今日2	△1・2	△2	△2	△2・1	△2	△2	△2・1	△2	2
ことし1・今年2	△1・2	△2	2	△2・1	△2	△2	△2・1	△2	△2
なにゆえ1・何ゆえ2・何故3	3	2	3	3・1	×	×	3・2	3	3
のちのち1・後々2	△1・2	×	×	2・1	×	×	△2	2・1	2
ひとたび1・一たび2・一度3	△1・2	△1	×	1	×	△2	3・1	1	3

※副詞用法かどうか判断できない場合は△を付し、辞典に掲げられている表記を△の後ろに番号で示す。

以上に見た副詞のほかに残るのは、以下のものである。

朝夕、折節、数々、時節柄、近頃、常々、常日頃、道々、夜昼（『三国』は「かずかず」「時節がら」「つねづね」も表記の候補として示す）

「朝夕」「近頃」など時の副詞として扱えるものが多い。小泉・玉岡（2006, p. 398）は「陳述の副詞は主語の前が、時の副詞は主語の前後が、様態の副詞と結果の副詞は目的語の前後が、それぞれ最も処理の負荷の少ない生起位置である」ことを母語話者に対する実験を通して明らかにした。本稿の立場からすると、小泉・玉岡のあげる「去年和子が子供を産んだ」「3時に健二がおやつを食べた」のうち、後の文は「健二が3時におやつを食べた」でも問題ないが、前の文は「去年、和子が子供を産んだ」とし、主語の後ろに「去年」が来る語順は避けたほうがよいという判断となる。「和子は去年、子供を産んだ」のように主題の「は」であれば、後ろに読点を付けやすいが、「が」の後ろには付けにくいと感じる書き手のことも考慮し、以上のように考える。また、陳述副詞の例としてあがる「当然健二が荷物を引き取った」「偶然和子が新ウイルスを発見した」についても、「当然、健二が荷物を引き取った」のように読点が読みやすさに貢献する。なお、読み手への配慮という観点から言えば、陳述副詞や時の副詞について、強調などの目的のために文の後ろに配するのは読み手の負担が増すから避けるべきだということになる。したがって上記の副詞のうち、特に時の副詞に関して表記辞典では、後続する語の文字種によっては、読点を使うよう促すという方法が有効である。この場合「近頃、東京で～」「近頃イギリスで～」のように使い分けるか、「近頃、東京で～」「近頃、イギリスで～」と読点を打つよう統一するか、2通りの選択肢がある¹⁰。

3.2 混種語の表記

「副詞DB」のうち混種語の100例は、「特に」「非常に」など漢語に付属的な「に」が結合したものの、「朝晩」「目一杯」など和語と漢語の組み合わせた名詞が副詞としても機能するものの二つに分かれる。前者のように形態により漢字連続が避けうるも

の、「朝晩」のように読点の使用が有効なものほかに、各社の標準表記が異なるケースがいくらか残る。

表3 表記辞典ごとの混種語の副詞とその表記¹¹

	NHK	教	朝日	共同	読売	公	三国	新選	明鏡
いくぶん1・幾分2	△1・2	△1	1	×	1	×	2	1	2
いちどきに1・一時に2	×	1	×	1	×	×	2・1	2	2
いっときに1・一時に2	×	×	×	×	×	×	2・1	×	2
いまいち1・今一2	×	×	×	×	×	×	2・1	1	2・1
じきに1・直に2	1	×	×	2・1	×	×	2・1	2	2
しだいに1・次第に2	2	2	×	2	×	×	2	1	2
せつに1・切に2	1・2	2	×	2	×	2	2	2	2
せんだって1・先だって2・先達て3	△1	△2	△1	△1	×	×	2・1	2	2・3
たいして1・大して2	2	1	2	2	×	2	2・1	2	2
力いっぱい1・力一杯2	1	×	×	1	1	×	1	2	2
体よく1・体良く2	1	×	1	1	1	×	2・1	1	1
どうりで1・道理で	×	×	×	2・1	×	×	2	2	2
とくと1・篤と2	1	×	×	1	×	×	2・1	1・2	2・1
なにぶん1・何ぶん2・何分3	△2	△2	3	3・1	×	3	3・1	3	3
無理やり1・無理矢理2	1	1	1	1	1	×	2・1	2	1・2
目いっぱい1・目一杯2	1	×	×	×	1	×	2・1	2	2

「一時に」の場合、「いちじに（時刻・同時）」「いちどきに」「いっときに」と三つの読みと四つの意味があるので、何らかの決まりが必要である。時刻については洋数字を用いることによって対処が可能であるが、ほかは文脈によっても読みを特定することが困難である。

3.3 漢語の表記

漢語は漢字で書くのが基本的であるとする、ここで見る漢語副詞は、後続する語との間に漢字連続がもっとも生じやすい語種である。「副詞DB」では、215例の漢語が対象となる。このうち、「あくせく（齷齪）」「がくがく（諤々）」「がぜん（俄然）」「急きよ（急遽）」「くっきょう（究竟）」「じらい（爾来）」「ひっきょう（畢竟）」「もちろん（勿論）」「るる（縷々）」「ろくろく（碌々）」は、表外字・表外音訓を含むため、丸カッコの外の表記を示すのが表記辞典としては一般的である。なお「じらい→以来、その後」「ひっきょう→結局、つまり」のように、新聞で日常語への言いかえを促している副詞もある。

表内字・表内音訓から成る語であり、かつ、かな書きされうる次のような語もある。なお、以下では、かな書きについての指摘・言及がある場合、それを番号で語の右肩に示す（副詞としての使用であることが明らかなものに限る）。たとえば「いちいち（一々）⁶」は、六つの表記辞典に「かな書きする」「かな書きも多い」などと記され

ていることを意味する。

いちいち（一々）⁶、いちおう（一応）¹、いちだん（一段）¹、いちばん（一番）³、
いっこう（一向）²、いっさい（一切）¹、いっそう（一層）⁴、いったい（一体）⁴、
いったん（一旦）⁷、いっぱい（一杯）⁷、ぎょうさん（仰山）⁵、ごく（極）⁷、
ごくごく（極々）³、こんりんざい（金輪際）¹、しごく（至極）²、しゃにむに（遮
二無二）⁵、じゅうぶん（十分・充分）¹、しょせん（所詮）⁵、ずいぶん（随分）⁵、
精いっぱい（精一杯）⁴、せいせい（清々）²、せいぜい（精々）⁵、せっかく（折
角）⁶、ぜび（是非）⁷、たいそう（大層）³、だいたい（大体）²、たいてい（大抵）
⁴、だいぶ（大分）⁶、だいぶん（大分）⁶、たいへん（大変）²、たぶん（多分）⁵、
だんだん（段々）⁷、ちょうど（丁度）⁸、つごう（都合）¹、とうてい（到底）³、
とうとう（到頭）⁹、どだい（土台）³、ふだん（普段）⁴、ふつう（普通）²、め
いめい（銘々）²、めっぽう（滅法）⁵、よけい（余計）² ※「精いっぱい」は部
分的なかな書き。

(2) の池上の引用にもあったように、「当用漢字表」の時代には、さらに多くの副
詞にかな書きが行われたのに対して（「ほんらい」など）、「常用漢字表」の時代に入
ると、梅棹（1988）が「学校教育においても、しっている漢字はできるだけつかわな
ければならない、という指導がおこなわれているようである」と指摘するように、と
にかく漢字で書くことが第一で、かな書きという選択肢が思い浮かばない書き手が増
えてくる。したがって、両方の世代が入り交じる現在においては、かな書きが有効な
漢語副詞のおおよその目安として、上記の一覧をとらえておくのが穏当であろう¹²。
しかし、かな書きか漢字表記かという点以外にも、読点など、副詞を用いるに当たっ
て有効な表記上の工夫は、何かしらあるはずであり、実際の文章にもとづいて、それ
を探るとするのが以下の課題となる。

4. 実用文における漢語副詞の表記

以下において、漢語副詞の使用について検討の対象とするのは、清水幾太郎（1907
～1988、東京）の『私の文章作法』（1971、潮出版社）、高橋義孝（1913～1995、東京）
の『私の人生頑固作法』（2001、講談社）、大野晋（1919～2008、東京）の『日本語と
私』（2015、河出書房新社）、梅棹忠夫（1920～2010、京都）の『行為と妄想』（2002、
中央公論新社）¹³、正田桂一郎（1924～2002、東京）の『正田桂一郎の天声人語』（2017、
朝日新聞出版）、外山滋比古（1923～、愛知）の『思考の整理学』（2018、筑摩書房）、
深代惇郎（1929～1975、東京）の『深代惇郎エッセイ集』の7人7作品である（随筆、
エッセー、一般向けの学術書を対象とするのは、実用文の副詞表記の参考に供するこ
ういう目的があるからである。なお、カッコ内は生（没）年と出身地を表す）。それぞ
れの生年を見れば明らかのように、これらの書き手は、「当用漢字表」以前に学校教

育を受け、戦後に活躍した（活躍する）人物ばかりである。つまり、「当用漢字表」以前の表記の習慣を身につけてはいるものの、「当用漢字表」以後の世代にも受け入れられる文章を書くために苦労を重ねた（であろう）人たちであり、いずれも優れた書き手として知られる。以下では、彼らが作中で用いた漢語副詞に限定し、表記上、どのような工夫が施されているのかを検討する。なお、ここでは「直接調べる」「大変詳しい」など漢語副詞の後ろに和語の動詞や形容詞が来る場合は、漢字連続の状態に対して直後の送りがなが語を特定するのに役立ち、「直接調査する」「大変詳細だ」といった文字列と比べて問題が小さいと見なす。これらの表記も問題であるとした場合には「しらべる」「くわしい」など、和語の動詞・形容詞は、すべてかな書きにするという方針を取ること考えなければならないが、現在は、このような表記方針は一般に受け入れられにくいと考える。したがって以下では、漢字表記の漢語副詞の後ろに、漢字表記の2字以上の漢語が位置する場合に限定して論じることとする（1字の漢語が後ろに来る例は資料内にはまれであったため、便宜上、議論の対象から外しておく）。

4.1 形態的な特徴

副詞には「非常に」のように「に」が必須のものと、「絶対・絶対に」のように「に」が任意のものがある。必須の副詞は「ひじょうに・非常に」いずれであっても、「に」によって語の切れ目が示されるので、後ろに漢字表記の語が来ても問題は起こらない（先に記したように「非常に」などは混種語に分類）。一方「絶対」の場合、「に」の有無が漢字連続の出現に影響を及ぼす。この点について、7人の書き手はどのように書き分けているだろうか。

表4 7作品における漢語副詞の形態

	清水	高橋	大野	梅棹	正田	外山	深代
案外1・案外に2	1 ⁵	1 ²	×	×	1 ⁵	1 ⁶	1 ¹
依然1・依然として2	2 ¹	×	×	×	×	×	2 ²
一向1・一向に2	2 ⁶	2 ¹	×	2 ¹	2 ¹	2 ⁶	2 ³
往々1・往々にして2	2 ¹	×	×	×	×	×	×
十分1・十分に2	2 ⁵	×	1 ¹ ・2 ¹	2 ⁵	1 ³ ・2 ³	1 ⁶ ・2 ²	2 ³
随分1・随分と2	1 ³	1 ¹	1 ³	1 ¹⁵ ・2 ¹	1 ¹⁴	1 ³	1 ⁶
絶対1・絶対に2	2 ¹	2 ¹⁴	×	2 ²	×	×	×
相当1・相当に2	2 ¹	×	×	×	1 ¹	1 ² ・2 ¹	1 ²
第一1・第一に2	×	1 ¹ ・2 ¹	×	×	1 ¹	1 ²	×
大変1・大変に2	1 ¹ ・2 ²²	×	×	1 ³⁴	1 ³	1 ¹⁷	1 ²⁰
断固1・断固として2	×	×	×	2 ¹	2 ¹	×	1 ¹ ・2 ²
段々1・段々と2	1 ¹ ・2 ¹	×	2 ²	×	×	1 ⁹	×
直接1・直接に2	×	×	1 ³	1 ³ ・2 ²	1 ⁵	2 ²	1 ³
適宜1・適宜に2	×	2 ¹	×	×	×	×	×

	清水	高橋	大野	梅棹	正田	外山	深代
特別1・特別に2	2 ²	×	×	×	1 ¹	×	×
突如1・突如として2	×	2 ¹	×	2 ¹	×	2 ²	1 ¹
突然1・突然に2	1 ²	×	×	2 ⁷	1 ⁷	1 ¹	1 ²
比較的1・比較的に2	×	×	×	1 ²	×	×	×

※この表では、副詞を漢字表記に統一した。右肩の番号は用例数。なお、形態を問題とする都合上、「充分（に）」の用例は「十分（に）」の中に含めてカウントした。

この一覧の中には「に」を付けるのがまれになってきているものが含まれる。たとえば「自然を直接に表現する」（外山）または「大久保自身も直接に天皇に拝謁したことがなかった」（坂本多加雄（1950～、愛知）『日本の近代2』2012、中央公論新社）といった使い方である。あるいは「適宜」の「それを適宜に使う必要もある以上」（高橋）、「案外」の「借りてよんだ、という人が案外に多いのである」（高見沢潤子（1904～2004、東京）『のらくろひとりぼっち』1996、光文社NF文庫）、「突然」の「アメリカのトルーマン大統領によって、突然に解任された」（老川慶喜（1950～、東京）『もういちど読む 山川日本戦後史』2016、山川出版社）、「比較的」の「——は、比較的に政治色が薄く」（渡辺昭夫（1932～、千葉）『日本の近代8』2014、中央公論新社）などにも同様のことが当てはまる¹⁴。

「に」が付きにくくなっていることを確認するため、本稿では「直接」を例とし、東京・山梨の大学生152人に対して意識調査を行った。「本人から～聞いた話」（『大辞林第3版』の「直接」の用例）の～に入る形式として「直接」「直接に」「直接的に」のいずれが一般的だと思うかという質問を設け、「直接」（143人）、「直接に」（0人）、「直接的に」（3人）、「直接・直接的に」（4人）、「いずれも一般的」（2人）という結果を得た。対義語の「間接」についても同様に、「友人を通して～に意向を聞く」（『大辞林第3版』の「間接」の用例）の～に入る形式として「間接」「間接的」の中から一般的だと思うものを尋ねた結果、「間接」（2人）、「間接的」（148人）、「間接・間接的」（2人）という内訳になった。つまり多くの大学生にとっては「直接・間接的に」の組み合わせが自然だということになり、形式としてはアンバランスである。（「間接」に比べて「直接」の使用頻度が高いことが「直接に」における「に」の脱落につながり、一方の「間接」は「に」が付く用法が知られなくなった結果として「間接的に」が多用されるようになった可能性がある）。『日本国語大辞典第2版』において「直接に」の初出例は「露団々（1889）〈幸田露伴〉三「或は間接に、或は直接（チョコセツ）に当社へ宛て」となっている（「間接」の項の「間接に」の用例は幸田露伴（1867～1947）のものよりも時期が遅いため例示を省略する）。この用法は下の世代にも受け継がれ、加藤周一（1919～2008、東京）は「間接に問題のあり様を提示した」（1986年2月21日）、「今日の日本国の状況で、直接または間接に」（1987年8月17日）のように用いている（引用には『夕陽妄語』（2016、ちくま文庫）を使った。なおこの

本で副詞の「直接」は「直接」の形が3例、「直接に」が17例、「直接間接に」が1例、「間接」は「間接に」が1例見られる)。このような用法が廃れ「直接・直接的に」「間接的に」といった言い方になってきた、したがって「に」を付けて使うには及ばないと考える立場もあるだろう(「直接的に」は「現代的コンズは、企業の技術力を環境配慮に利用する仕組みであり、わたしたち自身のライフスタイルや価値観の転換を直接的に要求するものではない」(高津融男「誰がどのように環境問題に取り組むべきか」『公共性の哲学を学ぶ人のために』2004、世界思想社)のように用いられ、この形を用いる人にとっては「直接的に」と「間接的に」とで形式が整う)。しかし、筆者の見方は、それとは異なる。まず「に」によって漢字連続が避けられる点で、少なくとも書きことばにおいて活用する意義があると考え。たとえば「直接依頼(する)」という形式は、そのような語はないと判断して①・①(平板+平板)というように発音するのが普通であろうが、「当社が安いのは直接依頼だから」(インターネット)のような例に接すると、⑤のアクセントを持つ複合名詞があるというように判断を変えなければならなくなる。副詞の場合は「直接に」という形式を用いるということであれば、このような読み手の負担は取り除ける。また「直接」や「間接」に「に」を付ける言い方は、非常に古い形式というわけではなく、少し前の世代が使っていた形式である。旧形式であっても合理性がある(読み手の負担が減る)と考え、その形式を学び、受け継いでもよいのではないか、旧形式から新形式に移ることのみをことばの変化と見るのではなく、新形式に移りそうなところで旧形式(合理性の認められるもの)に戻るといっても、ことばの変化の一つとして肯定的にとらえたいというのがここでの考え方である(初等教育に導入すれば、その形式を子どもが身につける可能性が広がる)。

なお具体的な掲載方法としては、必ず「直接に」にせよという指示ではないにしても、たとえば「ちよくせつ【直接】(副詞) ～(に)電話をかける」といった用例を掲げるなどして、選択肢の一つに「直接に」があることを表記辞典に示すというのは有効だと考える。

4.2 句読点

次に、漢語副詞の前後について、それぞれの書き手がどのように句読点を配しているのかを検討する。まず以下の表5について説明する。たとえば清水の場合、はだかの形で使われる、または「に・と」が任意で付きうる漢語副詞が144例ある(「非常に」「一段と」のように「に・と」の類が必須の副詞は除く)。そのうち、副詞の後ろに読点が打たれた例が89例あり、24例が漢字表記された漢語である。読点を使うことにより、「案外、民主的な親切な方法」「精々、自分の仲間が読んでくれるとか」といったように、漢字連続が回避される¹⁵。

表5 漢字表記の漢語副詞の後ろに打たれる読点

	清水	高橋	大野	梅棹	疋田	外山	深代
読点の割合	89 (61.8)	17 (8)	11 (7.9)	27 (9.3)	64 (22.9)	58 (30.7)	35 (21.1)
副詞の直後の漢語	24 (16.7)	7 (3.3)	6 (4.3)	4 (1.4)	31 (11.1)	10 (5.3)	19 (11.4)
副詞の総数	144	211	140	289	279	189	166

※数字は語数、カッコ内は百分率。副詞の直後の漢語は漢字表記されたもの。

ここで注目したいのは、外山の読点の使い方である。たとえば「一見、脈絡のないことを次々やる」「目を覚ますと、突然、謎が解けていたという」（この例では後ろが和語）というように読点が打たれている。読点をあまり用いない書き手であれば、「一見脈絡のない」「突然謎が」としそうなところである。この『思考の整理学』は、筑摩書房の付した文庫の帯によると、これまでに225万部が売れ、「2017年文庫ランキング（東大、京大生協調べ）」で2年連続して「東大で1番読まれた本」であり、京大では2番目に読まれた本だという。したがって、数多くの学生が外山の読点の使い方に接しているということであり、本の内容だけでなく、読点の使い方を学ぶためのテキストとしても、この本を活用することが可能なのではないかと考える（極端に読点の少ない文章を書く大学生が少なくない現状に鑑み、そのように考えるのだが、読点については、そもそも中学校や高校で十分な教育が行われていないところに問題の根がある）。外山自身は読点について外山（1995）の中で「たかが、点ではないか、などと言ってはいけない。文章の調子はこの読点で大きく違ってくる。ほかの人の文章を読むときにも、どこに点が打ってあるかに注意する」と記している¹⁶。

一方、漢語副詞の前に読点が打たれる場合については、表6のとおりである。

表6 漢語副詞の前に打たれる読点（副詞の総数は表5と同様のため省略する）

	清水	高橋	大野	梅棹	疋田	外山	深代
読点の割合	82 (56.9)	51 (24.2)	17 (11.8)	65 (22.5)	88 (31.5)	66 (34.9)	52 (31.3)
副詞の直前の漢字表記語	7 (4.9)	1 (0.5)	1 (0.7)	3 (1)	3 (1.1)	0 (0)	1 (0.6)

※この表では、かな書きされた副詞も含む。直前の語については、和語・漢語を合わせて検討する。

副詞の前には助詞が来ることが多く、漢字表記の語が置かれることはあまりない。しかし、7作品の中に一つだけ「そのノラがある日突然、夫と三人の子を捨てて」という例（副詞の前に読点がない）が深代に見られた。この形は「米ソ接近がある段階に達すれば、ある日突然、日本の首相がモスクワへ」（加藤周一『夕陽妄語1』（2016、ちくま文庫。初出は1988年5月24日）のようにほかの書き手にも見られる。「それまで続いていた状態が一変する様子」を表す一語相当の表現として解釈すればよいだろう。そして「新聞というものが現われた時、近年、ラジオやテレビの放送が開始された時」（清水）、「但しその間、事実上出入禁止のような」（高橋）のように、副詞の

前に「連体修飾成分+名詞（漢字表記）」（全体として副詞相当）が来る場合には、いずれの書き手も読点を用いている。このような方策は「○○以来」「○○の際」「○○{の／した}結果」「○○の場合」といった形式の場合にも当てはまる。以上をもとに、ここでは次の原則を設ける。

- (6) （漢字表記の）副詞の前に漢字表記の語を配する際は、副詞の前に読点を打つ。

たとえば「自分の場合全然理解していない」（インターネット）などは「自分の場合、全然、（、）理解していない」とする必要がある。なお7作品について副詞がかな書きの場合は「一九八五年の刊行以来ずいぶんと年月がたち」（梅棹）、「翌朝さっそく、晴れ晴れと」「世の中ずいぶん悪くなった」（疋田）というように前に漢字表記の語が来る例が3例見られた。(6)で「漢字表記の」をカッコの中に記したのは、副詞がかな書きの場合には、読点の必要性が微妙に変わってくると考えての処置である。

個々の副詞と読点の関係について簡単に述べると、高橋や大野は、表5を見る限り、読点をあまり使っていないが、それでも「去年」「近年」「古来」といった時の副詞、それから「一体」（陳述の副詞（益岡・田窪（1992））、「結局」「大体」、「当然」（評価の副詞（益岡・田窪（1992））など文頭に来やすい副詞の後ろには読点が打たれている。

4.3 語種

ここでは、漢語副詞の後ろに来る語の語種を問題にする。まず表を掲げる。

表7 漢語副詞に後続する語の語種

	清水	高橋	大野	梅棹	疋田	外山	深代
和語	82 (58.2)	129 (64.8)	90 (67.7)	132 (48.5)	154 (59.7)	113 (59.8)	87 (54.7)
漢語	55 (39)	54 (27.1)	40 (30.1)	127 (46.7)	95 (36.8)	68 (36)	64 (40.3)
外来語	2 (1.4)	3 (1.5)	1 (0.8)	2 (0.7)	4 (1.6)	3 (1.6)	2 (1.3)
混種語	2 (1.4)	13 (6.5)	2 (1.5)	11 (4)	5 (1.9)	5 (2.6)	6 (3.8)
計	141 (100)	199 (100)	133 (100)	272 (100)	258 (100)	189 (100)	159 (100)

※後ろに固有名が続く場合は除外してある。百分比の合計が99.9%となるような場合も、丸カッコ内には統一的に100と記す。

清水の場合、読点を多用するため、後ろに漢語が来ても、漢字連続の問題は起こりにくい。梅棹の場合は、「じっさい各社とも」「たいへん新鮮だった」など、漢語副詞がかな書きであることが多いため、後ろの漢語が漢字で表記されていても「かな+漢字」という形で漢字連続が回避されやすい。一方、高橋や大野の場合、副詞は漢字で書かれることが多く、読点は割合に少ないものの、「余計使われる」（高橋）、「特別むつかしかった」（大野）など副詞の後ろに和語（「使用」などの漢語サ変動詞語幹ではなく和語動詞、または「難解」などの漢語形容動詞ではなく和語形容詞）を適宜に用

いることにより、「漢語副詞+漢語（漢字表記）」の数は自然に抑えられる。ここが漢字・漢語を多用する書き手との大きな違いである。

4.4 漢字連続の割合

ここでは、かな書きや句読点などによって回避されていない漢字連続というのが、それぞれの書き手にどのくらい見られるのかについて検討する。

表 8 漢語副詞の後ろに二字以上の漢語が来る割合

	清水	高橋	大野	梅棹	疋田	外山	深代
漢字連続の割合	2 (1.4)	30 (15.1)	21 (15.8)	9 (3.3)	13 (5)	4 (2.1)	9 (5.7)
副詞（異なり・延べ）	37 / 141	58 / 199	55 / 133	54 / 272	60 / 258	52 / 189	58 / 159

※固有名は除く。副詞は、はだかの形でのみ使うもの、または「に」や「と」が任意で付くものに限る。

清水は、漢字連続が生じている箇所が極めて少ないが、皆無というわけではない。「少々乱暴に比較して」「終始根気よく」などの例がある。「直接～」などと異なり、副詞の後ろに来る語との一語化がありえないとの判断により、漢字連続をよしとしたのかもしれない。ほかの書き手の使用例のうち、「一時帰国し」「直接接触する」（梅棹）、「直接会話をした」（大野）、「直接体験し」（深代）については、一語として解釈される可能性がある語連続である。梅棹は、ほかの箇所では「直接に」を用いていることからして、「直接に接触する」としてもよかったのではないかという気もする。「一時帰国」は、1単位に発音されても2単位に発音されても、問題とするほどの意味の差がないとの考えもありそうである。もっとも、意味の差はなくとも、読み手に解釈の負担がかかることはあると考える。たとえば、ある本に「この仕組みは長つぎせぜ、一九八〇年二月に一時停止され」という一文があった。「信号の前で一時停止」という④のアクセントを持つ「一時停止」が意識されるため、このような例を見ると「一時停止④→そうではない→②・①だ」というように、少し手間がかかる。あるいは、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）が「一時停止」（語としての）に④と②・①とを認めているように、アクセントはどちらでもかまわないという見方もできる。しかし、二つ以上の意味に解釈されるあいまい文が悪文だとされるように、「一時～」の形式は、1語なのか2語なのかあいまいであり、望ましい形ではないとしてよいのではないか。意味上のあいまいさが生じるのを避けるのに加えて、品詞や語構成におけるあいまいさも避けるという発想である。さらに、「一時～」の場合には、「いつとき」など、ほかの読みとの区別という問題もかかえる。したがって、せめて副詞としては「しばらく」「一時的に」など別の言い方をするというような表現の工夫が要るのではないか。多くの場合、読み手は正確に解釈できるという反論もあるだろう。しかし、読み手の能力に期待し、何も配慮を施さないというのは、書き手の側の甘えと

取られても仕方がない。

「直接～」「一時～」の場合を除くと、「多少欠如し」（高橋）、「是非必要」（大野）、「一番空気が」（疋田）、「一度発表した」（外山）、「相当重症の」（深代）など一語化の可能性がないと言える使用例ばかりである（ただし外国人学習者など、一語ではないと判断するのが容易ではない読み手もいる）。先に（3）に示した事柄に反し、配慮がないようにも見えるが、このことが読みにくさにつながるかという点、必ずしもそうとは言えないようである。その根拠として大野の『日本語と私』の解説を書いた作家の井上ひさしの指摘をあげる。井上は大野について「現代日本語文の最高にして最良の書き手の一人」と評したうえで「漢字と仮名の塩梅が絶妙だ」とも述べる。つまり、大野自身が「是非必要」のような副詞とその後ろの漢字連続を容認することに加えて、読み手である井上も、それを気にしていない（あるいは無視できる程度であると見なしている）であろうことがうかがえる。したがって、（3）にあげた条件は、絶対の規則というよりも、文章を書くうえでの目安としてとらえておく（過度に漢字・漢語を用いれば「塩梅」はまずくなる）。

もう一つ、ここで指摘しておくべきことは、7作品の中には、漢語2語の連続は見られても、漢語3語の連続はないという点である。つまりたとえば「十分証明可能である」「本来鼻濁音地域ではない名古屋」「比較的周辺地域に点在し」「比較的最近日本に入った」（いずれも雑誌から）あるいは「中東の石油問題が一層国際政治問題化するのは火を見るより明らか」（外務省経済局編『70年代における資源外交』（1972、大蔵省印刷局）ここでは『日本の近代8』（2014、中央公論新社）からの引用）といった例がないということである。これらは「十分に証明可能／十分証明が可能」「本来鼻濁音を使う地域ではない名古屋」「比較的周辺の地域に」「日本に入ったのは比較的新しいこと」「石油問題が国際政治の中で「一層／さらに」深刻になる」といった表現にすることも可能である。上記の7人による7作品以外の文章の中に、このような例が一つもないのかどうかは調べたうえでないと断言できないが、一般の書き手が学べる事柄としては、以下のようにまとめられる。

- (7) 助詞の使い方や語順を工夫し、漢語副詞の後ろに2語、3語と漢字表記の自立語が続くのを避ける。

以上に見てきた表記上の種々の工夫は、一般の人間が文章を書く際にも参考になるはずである。もちろん今後、彼らが残したほかの作品についても同様の調査を行い、データに厚みを持たせなければならない。

5. おわりに

ここまで本稿では、副詞を使う場合、それをどう表記するかという観点から検討してきた。しかし、副詞は「接続詞・感動詞・副詞は、文脈上、意味を補足したり強め

たり、また、明確にしたりするという補助的な役割を果たすことば」（佐竹（2005, p. 32））とあるように、文の成立に欠かせない要素というわけではない。したがって、乱用は避けるべき品詞だという見方もできる（外山（1995））。清水が『私の文章作法』の中で「深々と」「早々と」といった表現が新聞に頻出することについて「最近、強い表現が多過ぎるように思います」と述べていることや「いわゆる「陳述副詞」類が、判断のしかたのまえ置きとしてつかわれることは言うまでもないが、それだけ、強調的な意味が出てくるから、ニュースなどの客観的報道には注意を要する」（宮地（1979, p. 145））という指摘を真剣に受け止めるとするならば、現代人は、むやみに程度副詞や陳述副詞を使っていないかどうかという目で自分自身の文章を眺める必要があるとの結論が導かれる。

今後は、上記の7人の書き手について、ほかの作品における副詞の使用状況も確かめる必要がある。また、「当用漢字表」および「常用漢字表」世代の書き手であり、かつ、表記に関して読み手への配慮がうかがえる書き手を探し、本稿で扱った世代の書き手と比較するといったことも視野に入れなければならない。さらに「直接に」のように、旧形式ではあるものの合理性が認められるといった事例を収集・整理する作業も行わなければならない。

注

- 1 たとえば「ふだんここにある時計」のような書きの場合、一つ一つの文字を拾い読みするので、かな連続全体を一語と誤解する危険性は小さい（ここでは拾い読みに手間がかかる可能性は問わない）。
- 2 『NHK 漢字表記辞典』『記者ハンドブック』を使うのは、前者の編集に本稿の筆者がかかわっていること、後者は個々の語に副詞であると明記する点から副詞表記への気配りがうかがえることという理由による。
- 3 『教科書 表記の基準』は東京書籍のご厚情により使用が許された。なおこの本は、教科書を作成する際の一つの目安であり、全教科でこのとおりに統一的に表記されるわけではないことを断っておく。
- 4 池上（1954）は「ガンツうまい」などと使う「ガンツ」（ドイツ語）について「昭和初頭に京都の高等学校に学んだわたくしはこの語の生々と使われる中であつた」と記している。
- 5 その語が立項されていない辞書については言及しない。
- 6 『明鏡』では標準表記欄に【一[▽]入】【一[▽]頻り】【一[▽]先ず】とあるので、「一しお」「一しきり」「一まず」が標準表記だと判断される。
- 7 武部（1982, p. 190）によれば「副詞・接続詞の場合は、助詞も来ないし活用語尾も付かないために、最後の一音節を送るという送り仮名の付け方が、「漢字・平仮名」と整えるうえで役に立つのである。つまり、「必ず手を洗う」「髪が少し抜ける」において「必ず・少し」という送り仮名が、漢字仮名交じり文をそれだけ読みやすくしている」という。この「漢字・平仮名」と整える」という点が「半ば」や「再び」といった副詞に漢字を使う理由としても当てはまる。

8 表中の「すでに」「まさしく」について補足する。玉木 (1978, p.3) によれば「数年前、東大の入試の答案に「がいに」というコトバをつかった例がときどきあって、ふしぎにおもわれたが、「すでに」のつもりと推定されたことがあった。生徒たちはふだん正確なよみかたもせずに「既に」と書いていて、答案でたまたまカナにした、ということらしかった」という。それから『角川』の「まさしく」の項には「「ただしく」も「正しく」と書くので、かな書きにするとよい」と、国語辞典としては、やや踏み込んだ記述がある。

9 「もうひとつ」は、関西から入ったことばだという (金田一 (1968))。また「いま一度」については、高橋 (1976) が終戦以前に東京には「いま一度」という言い方はなく「もう一度」であったはずだとの指摘を残している。国語辞典で俗語扱いにするかどうかといった、語感や位相にかかわる問題点である。なお、品詞面について言えば、この用法の「いま」が副詞だと意識されにくいという問題がある。同様のことが当てはまる「約」とともに東京・山梨の大学生 152 人に対するアンケート調査を行ったところ (2018 年 11 月, 12 月), 「いまひとつ」などの「いま」を接辞と答えた学生が 76 人、副詞が 46 人、形容詞が 13 人、名詞が 17 人という内訳になり、「約一時間」などの「約」については、副詞が 104 人、接辞が 26 人、形容詞が 18 人、名詞が 4 人という内訳になった。「約」については、「だいたい」「およそ」など類義の副詞をもとに品詞を特定しやすいことに加えて、アクセントが頭高型のままであり、後ろの語との間に切れ目意識が持ちやすいことが影響している可能性がある。一方、「いま」はアクセントが後ろの要素と一体化していることも手伝って、副詞として意識されにくくなっている。

10 『三国』の「せんだって」は、〔先[▽]達て〕とあり、() は「() の中は仮名書きにして (も) よい」表記を示す。「せんだって」の場合、「せんだって」が可能な表記と解釈できるが、一般の利用者の中には、記号の意味がわからず、「せんだって」とすべきか、あるいは「先だって」でもよいのかと迷う人もいそうである。

11 川上 (1974, pp.24-25) は、新聞などで「ニクソン米大統領は八日、ついに辞任を決意した」というように読点が使われることについて、意味上は「ニクソン米大統領は、八日ついに辞任を決意した」とすべきであり、また「八日」の後に読点を打つのであれば「ニクソン米大統領は、八日、ついに辞任を決意した」とあるのが適切だと指摘する。さらに「感覚的に、これでは読点が多すぎてうるさいというのなら、全然打たないのがいっそスマートではないか」とも言う（「八日」は時の副詞）。指摘のとおりだと感じるが、ここで「ついに」の代わりに「到頭」が使われるなら、どう解釈すべきだろうか。「八日到頭辞任を」という文字列でも問題なしとなさっただろうか。筆者としては、その場合、①副詞の前後に読点を打つ、②「八日」の後に読点を打つというように、選択肢の幅が狭まるのではないかと見る。「主題+時の副詞 (漢字表記)」の後ろに来る語が漢字表記かいなかによって、読点の必要性も多少変わるという言い方もできる。「八日辞任を」のように間に副詞を置かないというやり方も考えられるが、これについては、4.4 で論じる。

12 教科書会社の表記辞典が何らかの形で (たとえば各社が協力し『教科書表記辞典』を市販するようにして) 一般にも利用可能になるとよいと考える。現場の教師や学生・生徒が文章を書く際に参照できれば、①習った漢字で書ける語は常に漢字で書くとの思い込みが解消される、②かな書きという選択肢に意識が向く、③正書法意識が養われる、といった効果が見込めるからである。

13 梅棹忠夫は 1986 年に失明したため、文庫版においては、周囲の人々が協力して原稿の作

成を行った。あえてそのような書籍を資料として用いるのは、本書に「字をみて意味を判断することができなくなった」が、「耳で聞いて意味のわかる日本語であれば、ローマ字で書いても、完全に意味がわかるはずである。そういう言語に日本語がそだってほしいのである」との本人の弁があり、伝わりやすい日本語というものへの意識の高さがうかがえるからである。14 前田 (1983, p.195) は中世「に」抜きで使われだした「一々に」や「一向に」について「「に」が省かれても副詞として使われたということは、より副詞として国語の中に溶けこんだとも言えよう」と言う。

15 清水の読点の多さは、文章作法という本の性質が関係する可能性がある。今後、ほかの著作も確認しなければならない。なお、佐藤仁之助の『新撰送仮名法』(1899)では、「再(ふたたび)」のように本来的な副詞、または「皆(みな)」のような名詞から副詞用法が派生したものについて、後ろに読点を付け、送りがなは付けないという規則を設けている。副詞が漢字のみからなる場合は、読点を用いると言いかえることもでき、有効な手段であると言えるが、その後を受け継がれることはなかった。

16 読点は、息継ぎの場所を示すために打つと考える人が多く、その立場からすると、読点が多い文章は、不自然に息継ぎをしなければならなくなるから読みにくいという印象につながる。しかし、読点は意味の切れ目を示すのが本来的な役割であり、必ずしも息継ぎをするのにちょうどいい場所と一致するわけではない。最上(1986)には「原稿の句読点は参考にすが、それに引きずられないこと。そのとおりに読むと、機械的なポーズの置き方になって、いきいきとした感じが失われる」など、読点と息継ぎとの関係について、種々の指摘が見られる。この論考は、アナウンサーが原稿を読む場合を想定して書かれているようだが、一般の人が文章を読む際にも参考になる。

参考文献

- 池上禎造 (1954) 「漢語の品詞性」『国語国文』23-11 (引用に際しては『漢語研究の構想』(1984, 岩波書店) に収録のものをを用いた)
- 池上禎造 (1982) 「表記の歴史から見た現代語表記法」『講座日本語学 6』明治書院
- 梅棹忠夫 (1988) 「ワープロのもたらしたもの——事務革命はおわったか」『千里眼』21 (引用に際しては『日本語と事務革命』(2015, 講談社) に収録のものをを用いた)
- 川上泰 (1974) 「点の問題点」『言語生活』277
- 金田一春彦 (1968) 「言葉東京地図」『東京故事物語』河出書房
- 小泉政利・玉岡賀津雄 (2006) 「文解析実験による日本語副詞類の基本語順の判定」『認知科学』13-3
- 高橋英夫 (1976) 「ことばの成熟」『放送文化』31-3
- 武部良明 (1982) 「読みやすさから見た表記史」『講座日本語学 6』明治書院
- 玉木英彦 (1978) 「正書法をそだてよう」『教室の窓 東書中学国語』211
- 外山滋比古 (1995) 『文章を書くころ』PHP 研究所
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」『日英語比較講座 2』大修館書店
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法 3』くろしお出版

- 野田尚史（1984）「副詞の語順」『日本語教育』52
- 前田富祺（1983）「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究 4』和泉書院
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 宮地裕（1979）『新版 文論』明治書院
- 最上勝也（1986）「話し言葉の息継ぎと句読点」『アステ』3-4